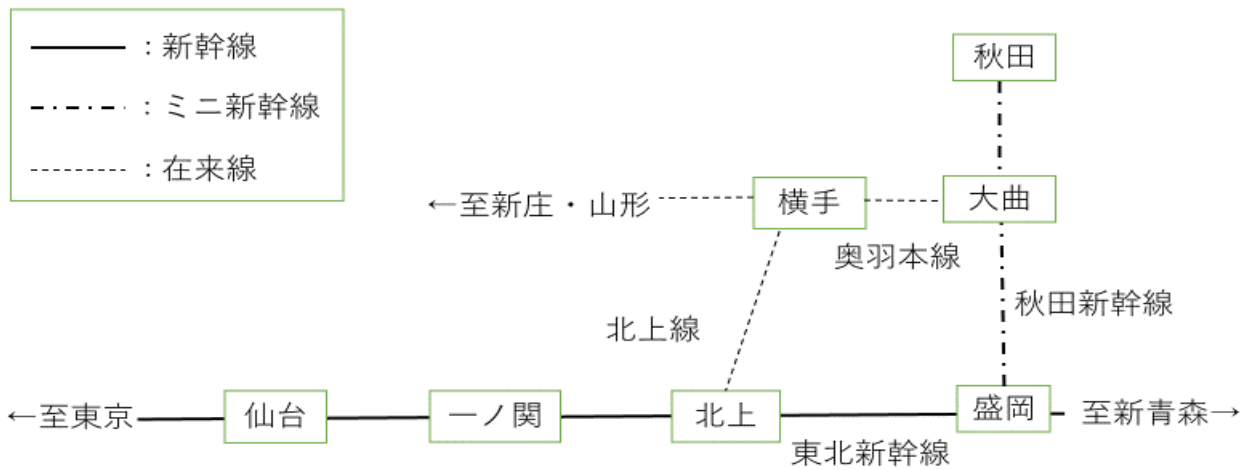


路線図（概略）



〈前回までのあらすじ〉
 爆破事件に巻き込まれたものの、碓氷の命懸けの行動で剣は助かる。二人は晴れて恋仲となり、少しずつ互いの距離を縮めていく。しかし、碓氷の過去が二人にゆっくりと影を落としていく。

〈車両概説〉

E2系……JR東日本が開発した汎用型新幹線車両。東北新幹線『はやて』や長野新幹線『あさま』などで一時代を築き、現在の新幹線の礎になっている。現在は主役を後継車両に譲りつつも、東北新幹線『やまびこ』、上越新幹線『とき』などを中心に活躍している(写真①)。

E4系……JR東日本が開発した新幹線車両。大量輸送に特化した車両で、全車二階建て構造で製造された。16両運転時の着席定員は世界最大を誇る。『Max』の愛称が与えられ、担当する列車名には全て『Max』が冠せられる。現在は上越新幹線のみで活躍(写真②)。

←写真①



←写真②



E3系……JR東日本が開発した2代目ミニ新幹線車両。

在来線に直通できるように車両寸法を通常よりも小さくして、秋田新幹線『こまち』でデビューした。2014年に秋田新幹線から撤退し、現在は山形新幹線『つばさ』をメインに東北新幹線、一部は観光列車に改造されて活躍している(写真③)。



↑写真③

第四話 死定席

「……では、ご依頼内容を確認します」

興信所の担当者がタブレット端末を俺の方に向ける。

「こちらの女性、碓氷瑞穂の身辺調査……ということでしょうか？」

黙って頷く。タブレット画面に映し出されているのは、東京駅のコンコースで男に殴り掛かるショートヘアの女。「前金と手数料の振り込みを確認しました。残りは成功報酬で構いません」

俺はコーヒーを飲み干す。溶け残った砂糖がじやりじやりと不味かった。

「しかし……調べてどうするつもりですか？」

俺は答えず、担当者を睨む。

担当者は慌てたように荷物をしまふ。黙って一礼し、突き出した腹を重そうに抱えながら喫茶店を後にした。俺は目を閉じ、タブレットの残像を瞼の裏に思い出す。

碓氷瑞穂。

お前は、俺が。

*

*

お盆休みの時期、運転士を生業とする礼士さんの職場は繁忙期を迎える。ここぞとばかりに列車を増発し、大勢の帰省客や観光客の足となるのだ。それだけではない。礼士さんは『竿灯まつり』にも参加する。豊作を願うこの祭りは、男衆がたくさんの提灯をぶら下げた長い竿、すなわち竿灯を手に夜の街を練り歩く。秋田の夏の風物詩だ。多くの地元企業が協賛し、それはJR東日本秋田支社も例外ではない。

竿灯は最大のもので重量が50kgにもなるという。そ

れを片手や額、肩腰などで支えて歩く。提灯を米俵に、竿灯を一本の稲穂に見立てるこの祭りは米どころ、秋田ならではのものだ。8月の頭に開かれ、その後にはお盆の帰省ラッシュとUターンラッシュが待っている。それが終わると大曲の花火大会が控えている。

そんな仕事に祭りにと夏は多忙を極める礼士さんだが、私とは割合上手くいっている。いや、向こうが本心ではどう思っているのかはよく知らないが……とりあえずそう思っておきたい。鉄道員は休日出勤もあるが、逆に平日に非番のことだってある。極めて不規則な勤務体系だ。平日、あまり人がいない映画館やカフェで気楽にデートを重ねる日々がぼちぼちと続いていた。時間を重ねるごとに、気恥ずかしさは居心地の良さに変わっていった。

時は大曲の花火大会が開かれる8月24日。その夜の店には、私を目当てにやって来た取材陣を相手に釜田さんの罵声が響き渡っていた。

「電話でも話しただろ、この店は取材お断りだってな！」

「でも、我々には国民に伝える義務が……」

「てめえらの視聴率稼ぎに付き合う暇はねえんだ！」

二か月前に東京駅で私が締めくくった大騒動。それについて最近また動きがあった。犯人である舞鶴の裁判が開始されたのだ。爆弾を抱えて新幹線に乗っ取るという前代未聞の事件だけに、世間からの注目は大きかった。……もともと、注目が大きい理由は他にもある。

天井から吊るされたテレビには、6月の東京駅の映像が映し出されている。舞鶴が礼士さんを人質に取り、警察と睨み合っているところに私が乱入する。そのまま犯人をぶっ飛ばし、二人っきりの世界に突入。どこのB級アクション映画よ、これ。このシーンをマスコミに撮られていたこと、それにシーンそのものの強烈さが仇とな

〈注意事項〉

*本作品に掲載した写真は法と安全に則って筆者が撮影したものです。無断転載を固く禁じます。

*本作品に掲載した全ての図において、無断転載を固く禁じます。

って、事件直後に私と礼士さんはマスコミに散々追い回されることになった。最近になってやっと収まって来たと思っただけだ。

「今すぐ出て行かねえと営業妨害でまとめて訴えるぞ！」

おい大和！ 塩持ってこい、塩！」

「釜田さん、どうぞ！」

「そーら、出てけー！」

「わあああああつー！」

釜田さんが派手にぶちまける塩にマスコミが泡を食って退散したのを確認して、私は厨房の奥から出てきた。

「……まったく、全くしつこい奴らだよ。確氷、もう大丈夫だぞ。出てこい！」

釜田さんは吐き捨てるように言い、びしやりと入り口を閉めた。

「そついや、お前らに少し話がある」

「話？ 何ですか？ 経営難で店を畳むんですか？」

「アホ」

釜田さんと叶ちゃんが漫才を始める。たまに見受けられる光景だ。

「今度の12月の話なんだが、知り合いの別荘に仕事で呼ばれられていてな。少し先だが、数人なら俺の友人を連れてきてもいいって話だ。行かねえか？」

「ご友人ですか？」

「ああ。この店を出す時に色々世話になった人でな、仕事と言う名目で久しぶりに呑みに誘われた。橋立って奴で、スパーシア製薬のお偉方の女房だ」

「スパーシア製薬って、あの大手メーカーのですか？」

叶ちゃんが大皿にひじきの煮物をよそいながら聞くのに対して、釜田さんは頷く。その手はせかせかとネギを刻んでいる。

「それなりに人数が集まるからな。料理とかの手伝い要員に人手が欲しい」

つまり、来て欲しいというよりも来いってこと？ 面倒だ。あまり気乗りしない。

「それじゃあタダ働きじゃないですか」

叶ちゃんが頬を膨らませながら渋い声を出す。

「まあまあ、そう言うとは思っていたがなあ……温泉もあるぞ、専用の」

「……温泉？」

肉じゃがを大皿によそっていた叶ちゃんの手が止まり、目がらんらんと光る。あ、これダメなやつだ。

「田沢湖の山奥の秘湯だ。乳頭温泉と同じ源泉なんだが、俺の知り合いがそこに別荘を持つてるんだ」

「行く！ 行きます！」

……はあ、やつぱり。叶ちゃんが釜田さん側に寝返った今、私が押し切られるのも時間の問題だ。でも、救いの神が訪れた。うまい具合に話を逸らす。

「こんばんは」

「いらつしやい！」

「いらつしやいませ！」

「いらつしやいませー」

礼士さんと霧島さんが連れ立って店に入ってきた。

「予約は三名って聞いていたが？」

「あ、一人遅れてきます」

釜田さんが霧島さんに頷いてから私を茶化しにかかる。

「おい、確氷。お帰りのキスははしなくていいのか？」

「愛しのダーリンが待ってますよお？」

「いやいや、これは男から行かんと。剣さん、男を見せましよう！ さあ！」

「ちよ、ちよつと！」

揃いも揃って私達をはやし立てる。私は顔を赤らめ、礼士さんにはにこにこ笑いながらカウンター席を陣取る。

「先輩が行かないなら私のものにしちやおつかない、剣さん、どうですかあ？ 先輩よりも私の方がいいんじゃないですか？」

「あつ、脂つこいのはちよつと」

「はあ！？」

礼士さんの一言に私は吹いた。

「ちよつと先輩、何笑ってんですか、このまな板！」

「うるさいわね大福、さつさと仕事に戻ったら？」

「誰が大福ですってこの鶏ガラ！ 私のこの体はダイナマイトボディって言うんですよ、知らないんですか？」

「あなたのはダイナマイトじゃなくてメタボよ、メ・タ・ボ。あ、ダイナマイトって膝に爆弾でも抱えてるのかしら？」

「な、何ですってえー！！？」

「仕事しろお前ら、まとめてクビにするぞ！」

釜田さんの怒声に私と叶ちゃんは首をすくめ、仕事に戻る。どうもこの後輩と一緒だと漫才をすることが多い。

「お、いぶりがっこですか。秋田といえはこれですよね」

霧島さんが早速箸を伸ばす。礼士さんはいつものように落花生の殻を割り、中身をつまむ。箸置き用なんだけどね、それ。

「それで、裁判の方はどうだったの？」

「どうって言われてもねえ……以前の白雪の裁判とは違って特に何も新事実が明らかになるようなことも無かったです、ただ証言するだけしてさつさと戻ってきただけだよ？」

この時期は大曲の花火大会に向けて臨時列車が多

いから、日程的には都合が悪かったんだけどね。一足先

に帰らせてもらって、さつきも臨時を走らせてきたんだ」
「へえ、そうか。お疲れさん。にしても霧島、お前もまた何で秋田に？ 国交省のお偉方に出す調書とかは大体終わってたんだろ？」

釜田さんも厨房の奥から質問する。

「それはそうですけどね。この間の事件は国としてはテロの一種として見てまして、各方面の体制構築のためにここ最近東奔西走しゆうんですよ。これ以上は国家機密で言えませんが」

「お役人さんも大変ですねー」

「慣れっこですよ」

叶ちゃんの労いに霧島さんはオールバックの頭を掻く。

「で、注文は？」

「釜田さん、今回はご馳走して下さいよ。以前東京駅で約束したでしょう」

「男に二言はねえよ。好きなだけ食べ。ただし残すなよ」

「よし剣さん、今夜は釜田さんの奢りです」

「剣は払えよ？ お前までタダにすると潰れるからな」

「ええー」

礼士さんは少しおどけたように不満げな声を漏らし、メニューを取る。

「ホッピー二つに、揚げ出し豆腐。チャーシューとメンマの盛り合わせ、長芋のポン酢漬け……霧島さん、どうします？」

「砂肝の香草炒めと、エイひれ。ホタテの貝焼き。まずはこんなとこですかね」

「あいよ！ ホッピー二丁！」

「はい！」

「はい！」

叶ちゃんがグラスを、私が焼酎の瓶を出す。

「にしても、『こまち』の座席って意外と狭いんですね。片道四時間もかかって疲れましたよ」

「ミニ新幹線は車体の大きさそのものが小さいですからね。まあ、座席だけ取り上げるならもともと狭いものもありますよ。世の中には『Max』という新幹線の自由席に3列+3列、みたいな詰め込み仕様もあるので」

「3列+3列って、三人掛けの座席が二つ並んでいってことですか？ 新幹線って普通は三人掛けと二人掛けですよね？ あまり想像が付きませんか……どれくらい狭いんですか？」

「僕の体では座れませんね。最近の新幹線では珍しく、背もたれだけをぱつたと反転させる仕組みの座席です」

礼士さんは決してメタボではなさそうに見えるが、実際のところは不明だ。しかし、そもその骨格が大きいからどこに行っても窮屈そうにしている。よく冷えたホッピーを出すと、二人は私に合わせて会話を中断した。

「サンキュー、瑞穂さん」

「ああ、どうも」

「いえ。ぬるくならないうちにどうぞ」

私は厨房に戻り、ホタテを炙る釜田さんの横で冷蔵庫を開く。確かメンマとチャーシューはこの上段にあったはずだ。背後から二人がグラスを合わせる音がした。

「……少し気になったんですが、霧島さんは『こまち』の何号に乗ってきたんですか？」

「29号でしたね、今日の」

「E3系の仕事ですか。何号車でした？」

「ええと……15号車でしたね」

「ああ、それは狭いはずですよ。あそこ16号車は元々自由席だったので座席を狭めに配置しているんです。来年のダイヤ改正で全て新車に置き換わりますが、それま

では12〜14号車を指定するか、それかグリーン車を使うことをお勧めします。……そうは言っても、『こまち』は普通車も2列+2列シートです。普通の在来線と同じですし、さつき話した3列+3列シートよりはマシですよ」

私はチャーシューとメンマの盛り合わせを出し、二人は早速手を伸ばす。それにしても、礼士さんの頭のどこにそんなに豊富な鉄道知識が詰まっているのか不思議だ。

「それで、霧島さん。僕に会わせたい人というのは誰なんでしょうか？」

「まあまあ、じきに来ますよ。会えば分かります」

「えらく勿体ぶった言い方だ。」

「しかし、また新幹線の車内で殺人ですか。巻き込まれないで良かったですね、剣さん」

霧島さんがテレビを見上げる。舞鶴の裁判のニュースが終わったが、次のニュースも新幹線絡みだ。

「本当に。全く、こうも立て続けに起きると参りますよ。一昨日に上越新幹線で、今度は東北新幹線ですか」

「連続殺人ですかねえ？」

叶ちゃんが会話に飛び入りながらエイひれを出していると、第三のお客さんが引き戸を開けた。予期しないことにそれは面識のある人物だった。

「ああ、矢野警部。こつちです。こんばんは」

「どうも。……おや、あなた方は」

矢野警部の少し小さい目が私達を見上げた。以前会った時よりも剛毛が伸び、目元近くまで伸びて何だかむさくるしい。

「矢野警部、お久しぶりです。以前のトワイライトエクスプレスの事件ではお世話になりました」

「ご無沙汰しております、剣さん。何といたしますか、寝台列車といい、前回の爆弾魔の事件といい、何度も事件

に巻き込まれて災難ですな。店員さん、烏龍茶を一つ」

叶ちゃんが烏龍茶を持っていくと矢野警部は少し驚いた顔をした。トワイライトエクスプレスを降りて、この店で働いていることを知らなかったようだ。今思うと、あの事件も遠い昔のような気がするが、そう言うにはあまりにも記憶が鮮明すぎる。

「警部、お飲みにならないんですか？」

「仕事が残ってしましてな、生憎」

渋い表情でお通しのいぶりがっこを頬張る警部の前

釜田さんがホタテの貝焼きを出す。大きな貝殻の中、貝の身が湯気を上げながらららららしている。

「お、待ってました。やっぱホタテは美味いなあ」

「こんな暑い時期によく食べますね、それより、自分に会わせたい人というのは剣さんのことですか？」

矢野警部は烏龍茶でいぶりがっこを流し込みながら尋ねた。

「ええ。今抱えていらつしやる事件が剣さんにうつつけなようなので、お節介を承知で引き合わせました。剣さんなら何か知恵を出してくれるかもしれませんよ？」

「はあ……一般人に捜査内容をへらへら喋りませんので、気持ちだけ受け取っておきます。犯人の目星もついていますのでね」

「でも証拠が無くて逮捕に踏み切れない、でしょ？」

警部は洗面をさらに渋くした。剣さんは黙々とメンマを口に運ぶ。二人はその減り具合の速さに驚き慌てて後追いしようとするが、私が運んだ長芋ポン酢漬けに標的を切り替えたようだ。霧島さんが酒を追加注文する。

「確水さん、『雪の茅舎』を冷で。剣さんもどうですか？」

「相伴に与ります」

酒好きな一人にグラスを渡す。その横で矢野警部は黙

って烏龍茶に目を落としている。

「警部さん」

礼士さんの垂れ目と警部の小さな目が交錯する。

「僕は今夜しこたま飲むつもりなので、ここで話したことは全てきれいさっぱり忘れまますよ。何か話されても、明日には何も覚えていないでしょう。話してみてください」

「剣さんもそう言ってますし、矢野警部。相談してみてもいいんじゃないですか？ この人の推理力はあなた自身、よくご存じでしょう」

私が二人に酒を注ぎ終わると、警部は座り直した。

「……くれぐれも内密に願いますよ、剣さん」

ニュースが終わったテレビからは大曲の花火大会が中継され始めている。

* * *

『昨夜午後9時過ぎ、上越新幹線Maxとき343号』の車内で男性の死体が発見されました。被害者は厚生労働省職員、宗谷大紀さん（53）です。宗谷さんは列車が新潟駅に到着後、車内でぐったりしているのを車掌が発見され、病院へ搬送されましたが死亡が確認されました。警察は遺体から毒物が検出されたことから、殺人事件とみて捜査を進めています』

昨日の秋田県警本部、夜。群馬県警への連絡を終え、ニュースで取り上げられた事件を見ていた私は少なからずげんなりした。抱えている事件の被害者が生前乗っていた列車の名前が出てきたからだ。

コンビニで買ったイチゴサンドを頬張りながらそのままテレビを見ていると、次に出てきたニュースが自分と犬塚刑事の二人組で担当している事件だった。

『今日午前、東北新幹線』はやて101号』の車内で女性の死体が発見されました。被害者は劇団二十四節気の

監督、潮風くるみさん（65）です。潮風さんは列車が盛岡駅に到着後、車内でぐったりしているところを車掌に発見され、駆け付けた警察によりその場で死亡が確認されました。警察は遺体から毒物が検出されたことから、殺人事件とみて捜査を進めています』

半分くらい使い回しの原稿をアナウンサーが読み上げ、天気予報に移る。大曲の花火大会を控えた秋田県は好天に恵まれそうだ。

「矢野警部」

容疑者への聞き込みを終えた犬塚刑事が戻ってきた。事件の本体は岩手県警が担当しているが、容疑者が秋田県にいたため我々も捜査に加わることになった。

「お疲れ様です。進展はありましたか？」

「それが、容疑者たちがアリバイを主張しています」犬塚刑事は少し出っ歯な口に飲みかけの牛乳パックを向かわせ、紙パックがべつたんこになるまで中身を飲み干した。

「最初から話して下さい」

犬塚刑事は鞆から捜査資料を引っ張り出し、机に並べる。私は前もって並べていた資料を脇にどかして場所を作った。

「まずは被害者の詳細な情報から。潮風くるみ、死因は砒素系の毒物による中毒死でした。首筋に針で刺された痕が見つかったので、背後から何者かに毒針を刺されたと考えられます。死亡推定時刻は午前9時前後、誤差は前後1時間以内です。殺害された時刻を9時と仮定すると、列車が仙台を出た直後です」

また砒素か。暗澹たる気分にはせられる報告だ。

「容疑者はこの三名、劇団二十四節気元メンバー、因幡真里香27歳、松風晴典29歳、砂丘愛依紗29歳、

以上三名です。この三人は一週間前に劇団をクビになっています」

捜査資料に載せられた顔写真に目を落とすと、なるほど、三人とも劇団員というだけあって、化粧をすればそれなりの見た目になりそうではある。

「解雇された理由は？」

「劇団の内部規則に違反したようです。元から素行は良くなかったようです。才能にも恵まれなかったようですね。動機は解雇されたことへの逆恨みといったところではないでしょうか？ 潮風くるみを殺害するにしても、他に動機を持ち合わせている人間が見当たらないんです」

「それでも、アリバイを崩さないことにはどうにもなりません。そのアリバイというのは？」

大塚刑事は資料をめくる。私はイチゴサンドを食べ終え、今度はピーナツバターサンドに手を伸ばす。

「昨日は朝から新幹線に乗っていた、と言っんです。潮風くるみが乗っていた列車とは別の列車、『こまち23号』に乗っていたと主張しています」

パソコンで時刻表サイトを呼び出す。『こまち23号』は『はやて101号』の直後の列車だ。

「三人は今、どちらに？」

「横手です。昨日の昼前に横手駅に到着して、現地の友達と待ち合わせたそうです。音戸亜紀という女性で、松風の古馴染みだとのこと。本人にも確認しましたが、11時40分くらいに揃って横手駅に現れたそうです。大曲の花火大会を見に行くのに泊めてもらうつもりだったか。三人とも秋田はおるか、東北そのものが初めてだと話していました」

「ふむ。『こまち23号』を使って横手に行くとするば、それくらいの時間になるのですか？」(図②参照)

こまち23号・奥羽本線普通列車 時刻表

東京	7:32	発 (21番線発)			
上野	7:38	発			
大宮	7:58	発			
仙台	9:14	発			
盛岡	10:02	発 (はやて23号と分割)			
田沢湖	10:33	発			
角館	10:47	発			
大曲	10:59	発	→奥羽本線普通2438M	11:16	発
秋田	11:32	終着			
				↓	
			横手	11:34	着

出典：JTBパブリッシング『JTB時刻表2013年9月号』

大塚刑事は頷き、私のパソコンを操作する。駅名を入れるだけで一発で最速ルートが分かる。便利な時代だ。

「大曲まで『こまち23号』に乗車して、そこで新庄行きの普通列車に乗り換えると11時34分に横手に到着します。音戸の証言とも矛盾しません」

今のところはとりあえず、因幡、松風、砂丘の三人の行動に矛盾は見られない。

「三人は列車内で何をしていたのか聞きましたか？」

「ずっと持ち込んだパソコンで映画を観ていたそうです。三人揃って。途中、トイレに抜けたりはしたようですが」

「パソコンで映画ですか……三人くらいなら一台で事足りますな。両側から覗き込めばいいので。新幹線か普通列車の車内で三人の姿を見た者は？」

「確固たる目撃証言は今のところ出ていません。ただ、岩手県警からの情報によると『こまち23号』で三人が座っていたと主張している指定席は全て発売済みだったようです。JR大船駅の自動券売機から発売されていた。12号車の4A、4B、4C席の三つですね。まあ、指定券が回収できなかったのだから指紋を採取することはできそうにありませんが」

物証が無いのは少々しんどい。

「車内の監視カメラはどうですか？」

「それが、『こまち23号』の車内には監視カメラが付いていないみたいで、当然ながら映像を確認することもできませんでした。『はやて101号』も同様です」

報告はこれで大体終わりのようだが、疑問点を一つぶつける。

「劇団を解雇されたみたいですが、理由に内部規則違反を挙げていましたな？ 具体的には？」

「それが、少し妙なんです。警部は数占いなんかを信じ

ますか？」

「いいえ、全く信じません。それが？ 藪から棒にどうしました？」

「被害者の潮風くるみはとても数占いや風水に凝った人間で、内部規則もそれに則したものが多かったようなんです。劇団の中でかなりの権力を持っていたこともあり、あまり表立って逆らわないようにしていたそうです。ですが、例の三人は日頃からそれをまるつきり無視していたようです。それで潮風も苛つきが溜まっていたのか、チケット販売に内部規則違反があったとして解雇してしまっただけです。再就職先の話をするのもなく、散々な罵倒を浴びせて着の身着のまま追い出してしまったようです。一週間前のことです」

才能が無かった、というのも背景にあったのだろうか。劇団員がチケット販売を兼任するのもそうおかしな話ではなさそうだ。でも、解雇の話を知るとなかなかハラ体質の職場だったようだ。

「数占いに凝っていた、と言いましたな？ 例えは？」
「潮風くるみは特に、ラッキーナンバーって言うんです。理由は分かりませんが、何かと数字の2を臍にしていたようです。劇のリハーサルなどでも必ず2が付く番号の席に座っていたようです。複数桁の数字でもどこかに2が入っていることを日頃から求めていたようです。似たような理屈なのかどうか分かりませんが、アルファベットのAにもかなり執着していたようです。ちなみに、彼女が殺害された現場の『はやて101号』は全車指定席で、彼女が選んだのはやはり2号車2A席、2とAで固めています(図③参照)」

はやて101号 時刻表・座席表

東京	7:16	発 (21番線発)
上野	7:22	発
大宮	7:42	発
仙台	8:58	発
古川	9:12	発
くりこま高原	9:22	発
一ノ関	9:37	発
水沢江刺	9:47	発
北上	9:55	発
新花巻	10:03	発
盛岡	10:15	終着

E																			
D																			
C																			
B																			
A																			

♡：潮風の席 (2号車2A席)



時刻表出典：JTBパブリッシング『JTB時刻表2013年9月号』
座席表出典：JR東日本公式サイト 写真：『はやて101号』普通車

2とA、か。これ以上なく何の変哲もない文字だ。意味を見出すのも馬鹿馬鹿しい。

「その変な趣味……いや、拘りというのは劇団員には知られているものなんですか？」

「ええ。劇団内部に限らず、業界全体で割と有名な話らしいです」

個人の趣味嗜好にとやこや言うことはしたくないが、変な拘りもあったものだ。

「その潮風氏なのですが、少し興味深い情報が入りましてな」

犬塚刑事の報告が終わったことを確認し、私は手に入った資料を見せる。

「これは、潮風氏の昨日から今日殺害されるまでにかけての行動を洗ったものです。犬塚刑事、昨夜の上越新幹線の事件の話は聞いていますか？」

「ええ。厚労省職員が車内で毒殺された事件ですね？」

手渡した資料に目を落としていた犬塚刑事は、やがて驚いたように目を丸くした。

「昨夜、潮風くるみは『Maxとき343号』に乗っていたんですか!？」

「ええ。しかも、殺害された宗谷大紀氏の席のすぐそばのようなのです。宗谷氏は2号車2階、22C席。潮風氏は2号車2階、22A席。一席の間隔を空けて座っています。これは昨夜、宗谷氏のニュースを見た潮風氏が警察に連絡して、高崎で群馬県警に話したことです。」

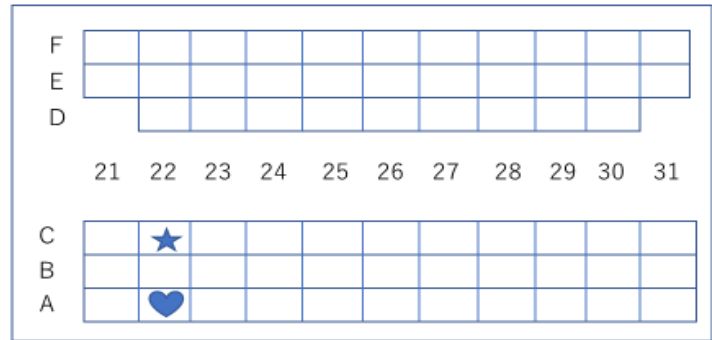
「自由席で狙った番号の席に座れたからよく覚えてい」と、そう言ったそうです」

「自由席で狙った座席番号ですか。そこまで執着するとすると、もはや病気ですね」

犬塚刑事も処置無し、という顔をする。(図④参照)

Maxとき343号 時刻表・座席表

東京	18:52	発	(21番線発)
上野	18:58	発	
大宮	19:18	発	
熊谷	19:31	発	
高崎	19:48	発	
越後湯沢	20:17	発	
浦佐	20:29	発	
長岡	20:42	発	
燕三条	20:52	発	
新潟	21:04	終着	



時刻表出典：JTBパブリッシング『JTB時刻表2013年9月号』
座席表出典：JR東日本公式サイト

☆：宗谷の席（2号車2階22C席）
♡：潮風の席（2号車2階22A席）

「彼女は群馬県警から事情は聴かれたものの、事件へ関与している可能性は無いと判断されたみたいでしてな。そのまま高崎で用事を済ませ、翌朝の新幹線『あさま502号』で大宮に出て、そこから『はやて101号』に乗って一ノ関に向かっていた途中で殺害。一ノ関に住む身内が一週間くらい前に出産したらしく、その挨拶に向かっていたようです」

「高崎での用事って何だったんでしょうか？」

「渡英する劇団関係の友人に会いに行つて、送別会をしたようだ」と群馬県警から聞いています。そこで宗谷氏のニュースを見て、慌てて警察に駆け込んだようです。一ノ関に行く前日となかなか慌ただしいですが、『日程がつかなかった』みたいなことはぼしていたようです」

「多忙な人ですね」

犬塚刑事は少し考えこみ、言う。

「もしかして、潮風くるみを殺害したのは宗谷大紀を殺害した人物と同じなのではありませんか？ 潮風くるみは何か犯人にとつて都合の悪いものを見てしまい、口封じのために殺害された」

ピーナツバターサンドを食べ終えた私は苦い顔をした。口の中は甘いのだが。

「それは一理ある意見ですが、そもそも宗谷氏が殺害される動機が何一つ出てこないのです。犯人らしき人もいません。当然、先に話してくれた三人との関係性も皆無です。なので、宗谷氏の事件については新潟県警も群馬県警も半ばお手上げ状態なのですよ」

「……毒物を使った無差別殺人、とかですかね？」

「それならわざわざ日を跨いで犯行に及ぶ理由がありませんし、既にもっとたくさんの被害者が出ているのではありませんか？」

それからしばらく話を続けてみたものの、私と犬塚刑事は妙案も閃かず、そのまま押し黙ってしまった。

* * *

礼士さんが話を聞き終わる頃には、三人は既に料理のほとんどを食べ尽くしていた。最後に警部が長芋のかけらをつまむ。これ、短冊切りにした長芋をポン酢に漬けただけという超お手軽な料理だ。さっぱりした味わいで夏にはうってつけだ。

「事件の内容はこれで全部ですか？」

礼士さんの質問に警部はスマホのメモを見る。

「宗谷氏の死亡推定時刻をまだ教えていませんでしたね。宗谷氏が一昨日の19時前後でした。『Maxとき343号』が上野を出た直後です」

「宗谷さんと潮風さんに何か共通点は？」

「皆無です」

礼士さんは黙り、警部が話している間に頼んだ『酔鯨』の冷を飲み干す。

「『はやて101号』の車内で誰か目撃者はいなかったんですか？」

「残念ながら、これも確たる証言は得られませんでした。車内に監視カメラも設置されていなかったため、手がかりはゼロです。東京駅などの監視カメラの映像も当たっています、解析待ちです」

「宗谷さんが殺された頃、例の三人はどこで何を？」

警部はスマホをいじり、別のページを呼び出す。霧島さんはそんな二人をよそに、とうもろこしの天ぷらと納豆厚揚げ、豚キムチを追加オーダーした。私はどうもろこしに衣をつけ始める。

「砂丘が熊谷での劇講演を終え、『Maxたにがわ422号』で東京に出て、そこから東海道線で平塚の自宅まで

帰宅していたそうです(図⑤参照)。残る因幡と松風にはアリバイがありませんでした」

「またMaxですか」

霧島さんが口を挟む。時間も押してきて、だいぶ酔客が増えてきた。私と叶ちゃん、釜田さんは料理に追われ、段々と礼士さんの話を聞いているどころでは無くなつてきてしまった。

「ん？ 三人とも劇団を解雇されたと聞きましたけど、砂丘は熊谷で劇講演をやっていたんですか？」

「他の劇団の代役として急遽呼ばれたようです」

「へい、豚キムチ、お待ちどお！」

釜田さんがいつの間にか炒め物を終わらせている。カウンターの越しに朱く染まった炒め物を盛った皿を預ける。

「宗谷さんは毒殺されたそうですが、どうやって？」

「新潟県警が座席を調べた結果、宗谷氏が座っていた22C席の座面モケットに毒針が埋め込まれていました。何も知らずに座ったら尻に毒針が刺さって死亡します。毒物は砒素系のもので潮風氏の殺害に使用されたものと同成分ですが、入手先も三人との連関もまだ分かっています」

「失礼します、納豆厚揚げですー！」

叶ちゃんも焼き物を終わらせ、三人の元に運ぶ。私はどうもろこしの粒がばらけない程度に固く溶いた衣がこんがりと揚がるのをじりじりと待っていた。

「実は、時刻表トリックは我々警察にも解けました。単純だったので、ですが、そのルートを使ったという証拠、あるいは三人が『こまち23号』に乗っていないか、という証拠、これが分からないんです」

ようやく衣がさつくり、中の身がぱちぱちした食感になった。

Maxたにがわ422号 時刻表

越後湯沢	17:06	発
上毛高原	17:20	発
高崎	17:41	発
本庄早稲田	17:51	発
熊谷	18:01	発
大宮	18:14	発
上野	18:34	発
東京	18:40	終着

(21番線着)

出典：JTBパブリッシング『JTB時刻表2013年9月号』

「お待たせしました、どうもろこしの天ぷらです」

「ああ、瑞穂さん、ありがと」

礼士さんの視線が私を射抜く。普段とは異なる鋭さに私は少し気圧された。

「時刻表トリックは僕にも目星がついています。恐らく……」

その先が少し気になったが、他の客から注文に呼ばれてしまった。

「もしかしてあなた、以前の新幹線の事件の？」

腹の出たサラリーマンからの注文、『黒龍』の冷に刺し盛り、フライドオニオンを伝票にメモしていると、あまりありがたくない質問が来た。

「何の話ですか？」

とほけてあしらっておく。またマスコミに追われたり、あることないこと好き勝手に書かれるのは御免だ。

「ありがとうございますー！」

「まいど！」

叶ちゃんと釜田さんの挨拶が店内に響き、私も無意識に挨拶する。そして出口の方を見ると、渋い表情を僅かに柔和にした矢野警部がスマホを耳にあてがいにしながら店の外に消えるところだった。

「やっぱり剣さん、あなた凄いですよ。たったこれだけで証拠を見つけるなんて」

「矛盾点を突いただけですよ」

どうやら私が仕事に追われている間に謎解きを済ませてしまったようだ。私は内心歯噛みするとともに、恋人を直視するのが憚られた。

結局、私が事件の真相を聞くのは、店じまいの時間まで待たなくてはならなかった。

夜が更け、店じまいをする。明日が非番の礼士さんは、私が片付けを終えるまで店の前で待っていてくれた。釜田さんが気を利かして私を早く帰してくれたこともあって、日付が変わる前には合流できた。

「お疲れ様」

「ええ」

店から家まではすぐ近くだ。私はゆつくりと歩く。こうやって二人で歩く心地よさに身を委ねていたかった。

「明日、非番なんでしょ？」

分かり切っていることを聞く。この人が酒を口にするのは次の日が非番の場合だけだ。

「うん。明後日は始発だけだね」

礼士さんはいつものように、穏やかな声だ。

段々とアパートが近付いてくる。

「……あのさ、礼士さん」

「ん？」

「私……少し飲みたい気分なのよ。良かったら、もう一軒付き合ってくれない？」

優しいな垂れ目が少し驚いたように大きくなった。

「それに……謎解きをまだ聞かせてもらっていないし」

釜田さんと叶ちゃん、私が他の客の相手をしている間に謎解きを聞くことができたようだった。

「……うん、いいよ。どこに行こうか？」

行先は考えていなかった。私はぶらぶらと夜の街へ歩みを進める。秋田駅の自由通路を抜け、市民市場の向こうに出て、そのまま歩みを止めない。辿り着いたのは川反。そこは秋田随一の繁華街だが、こんな夜更けともなるといわゆる「夜の街」の顔を見せる。気怠く、少し安っぽい色香が漂う街だ。

狭い路地の奥にこじんまりとしたバーを見つけ、カウ

ンターの真ん中辺りに並んで腰かける。貸し切りだ。

「お飲み物はいかがなさいますか？」

「そうですね……マッカランをロックで。瑞穂さんは？ 奢るよ」

「え、お金大丈夫なの？」

「霧島さんに馳走してもらったから平気だよ」

霧島さん、タダで食べてなかったっけ？ ……まあいいか。

「じゃあ……青りんごハイボール、炭酸割り」

「かしこまりました」

店主が酒の用意を始める。店内に囁くのはジャズの名曲『A列車で行こう』だ。

程なくして、私は恋人とグラスを合わせた。薄い琥珀色の酒を口に含む。ほんのりと甘く、思っていたよりもかなり強烈なアルコールに目が眩む。

「それで、どこから話そうか？」

「そうですね……私が分かるように話して。最初から」

礼士さんは眼鏡をかけ直し、おもむろに口を開いた。

「じゃあ、結論から言ってしまうおうか。宗谷さんも潮風さんも、例の三人組ないしはその中の誰かに殺された。そう考えて間違いないと思う」

殺す。殺される。文字にしてしまえばそれだけのことだが、その言葉の裏に潜むものを私は知っている。

「瑞穂さん、『7分間の奇跡』って知っているかい？」

首を横に振る。

「映画のタイトルか何か？」

「いや、そうじゃない。この言葉は東京駅で新幹線の車

内清掃をするスタッフを指した言葉なんだ」

新幹線の車内清掃なんて今まで意識したことすらない。「それがどうしたの？」

「列車は終点に着くと、そこから側線や車庫に入る。もしくはその駅で折り返して反対方向の列車として出発する。基本的にそのどちらかなんだ。駅で折り返す場合、新幹線や特急列車は車内清掃をするのが普通。でも、それにあまり長い時間をかけることはできないんだよ。ホームの数が限られているから、たくさんの列車を捌くには折り返し時間を少しでも短くしないといけないからね。だから車内をわずか7分で清掃するスタッフの存在は大

きいし、それは神業とさえ言える」

「凄業の職人集団がいるのは分かったが、それが事件とどう関係するのだろうか？」

「今の話は前口上に過ぎなくて、重要なのは東京駅で折り返す列車がある、ということなんだ」

礼士さんはポケットからスマホを出した。何を見せてくれるのかと思ったら、オンラインの時刻表だった。

「宗谷さんが殺された一昨日、22日。その日は砂丘さんが『Maxたにがわ422号』に乗っていたみたいなんだ。何号車に乗っていたかまでは分からないけれど、この列車はちよつと面白くてね。東京駅に何時、何番線に着くかちよつと見てみてよ」(図⑥参照)

礼士さんはそう言い、私にスマホを差し出す。

「東京に18時40分、21番線に到着して書いてあるわね……もしかして、これが折り返して宗谷さんが乗っていた列車になるの？」

「勘が良いね。その通りだよ」

礼士さんは別の時刻表ページを見せる。

「宗谷さんが乗っていた『Maxとき343号』は21番線から18時52分に出発する。車内清掃の時間も含めてたった12分で折り返すんだけど、これが普通なん

だ」(図④参照)

礼士さんがマツカランを口に運ぶ。

「でも、その折り返し列車で殺されたのは宗谷さんであつて、潮風さんではなかったんでしよう？ 何で宗谷さんは殺されなくてはならなかったの？」

「それはね」

マスターがおつまみのピスタチオを運んできて、会話が一時途切れる。皿が残され、礼士さんはピスタチオの殻を剥きながら話を再開させる。

「宗谷さんは間違つて殺されたんだ。砂丘さんが犯したミスによつて不運にも死んでしまった」

「……事故、つてこと？」

「見方によつてはそうかもしれないね。宗谷さんにとつては不運な偶然だった。潮風さんに仕掛けたはずの罠が彼に対して誤作動したんだよ」

私もピスタチオに手を伸ばしながら考える。偶然だと言うのなら、宗谷さんが殺された件で動機や犯人像が浮かんでこないのにも納得が行く。ただのとぼちりだったのだから。

「罠、つて？」

「説明していくけれど、その前に瑞穂さんに一つ質問するね。新幹線の座席というところ、どんなものか思い浮かぶ？」

少し返事に困る質問だ。

「どうつて言われても……要はただの椅子でしょ？」

「そう言われると元も子もないんだけどね……まあ、素人目にはどれも同じか」

礼士さんは苦笑いして続ける。
「じゃあ、質問を変えようか。瑞穂さん、あなたが5、6人のグループで新幹線に乗ったとしたら、座席はどうする？」

「向かい合わせにするとと思う。バラバラに座るより、団体でまとまつた方が楽しいし」

「向かい合わせつて、どうやつて？」

「それは、ほら、座席の下のペダルを踏んで、椅子をぐるぐるつて回すんじゃないの？」

私が身振りを交えて答えると礼士さんはあつさりと言った。

「確かにそう考えるよね。実際、ほとんどの新幹線はそういうタイプの座席だよ。専門用語で回転式クロスシートつて言うんだけど」(図⑥参照)

回転式……ああ、座席が丸ごと回転して向きが変わるのか。礼士さんがネット上にあつた図を見せてくれた。

「砂丘さんもそう考えて罠を仕掛けたんだ。彼女が『Max たにがわ422号』に乗っている間にね。折り返し作業で座席の向きが変わることを見越して、2号車2C席の座面に毒針を仕込んだ。その席は三人掛けだから折り返し作業で座席が回転すれば22A席になる。そうすれば潮風さんが大好きな2とAで構成された席になる。2号車2階、22A席。潮風さんにとつてはこれ以上無いくらいにうつてつつけの座席だ。自由席で早い者勝ちだから彼女は確実にその席を狙う。砂丘さんはそう考えた」

私はハイボールを喉に流していたため口がきけず、手で礼士さんをストップさせた。強めのアルコールで口の中を空にして質問する。青りんごの香りが鼻に抜けた。

「で、潮風さんは想定通り22A席に座つたんでしょ？ だったらなぜ、亡くなつたのは22C席に座つていた宗谷さんだったの？」

「座席が回転しなかつたからだよ」
ピスタチオの殻を剥いていた私の手が止まつた。

回転式クロスシート 図説



回転式クロスシート

新幹線・特急列車などの優等列車で広く使用される基本的な座席。座席そのものが180°丸ごと回転することで着席方向を変更できる。イラストは二人用座席を真上から俯瞰した概略図。

「回転しなかったって……乗客は後ろ向きのまま座ったってこと。」

「いや、座席が回転する構造じゃなかったんだ」

礼士さんは困惑する私の前にスマホを差し出す。

「現在、『Max』の名前が冠せられる列車には全てこのE4系っていう新幹線車両が充当されるんだ。これ、性能を輸送力に全振りした列車でね、2本繋いで16両で走る時の着席定員は世界最大。1634人を誇るんだ。ギネスにも乗ってるんだよ」

写真を見せてくれる(写真②参照)。2階建てのずんぐりむっくりな新幹線だ。というか、ギネスってそんなことまで記録しているのか。

「輸送力を確保するための工夫には色々あって、その一つが3列+3列シート。潮風さん、それに宗谷さんが座っていた座席だよ。この座席は回転式クロスシートではなくて、転換式クロスシートって言うんだ」

また写真。紫色の座席がずらずらと並んでいる。座席の構造を図解したイラストもある(図⑦参照)。

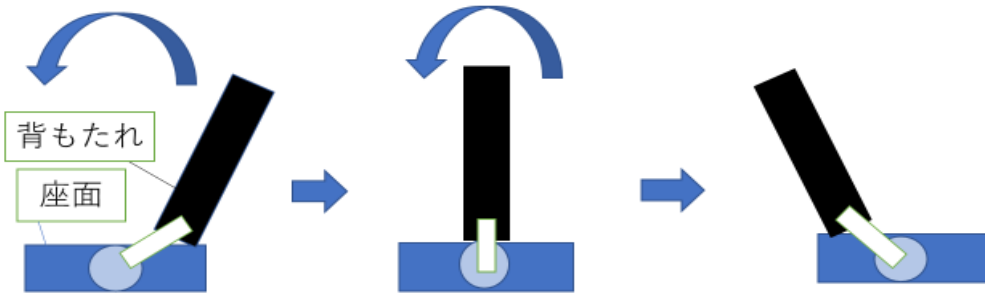
「ってことはこの座席、回らないの？」

「うん。背もたれの向きだけを変えるから、座面の場所はいれ替わらないんだ。つまり、22C席に仕込んだ毒針が、22A席に移動することはない。砂丘さんはそれに気付かず、折り返し作業で座席が回転するものと思込んで毒針を仕込んだ」

そんなの素人に気付けという方が無茶だ。私は恋人の豊富な鉄道知識に対して驚きを通り越して呆れていた。誤魔化すようにピスタチオを口に放り込み、噛み砕く。

「結果、22C席に座った宗谷さんが亡くなり、標的である潮風さんは生き残った。これが翌日の話に繋がる」

転換式クロスシート 図説



転換式クロスシート

回転式クロスシートよりも簡単な機構で着席方向を変えられる座席。背もたれの向きだけを変更するため、座面の位置は入れ替わらない。イラストは座席を真横から見た概略図。

翌日の話……潮風さんが殺された件か。

「潮風さんは翌日の『はやて101号』の車内で殺害された。『Maxとき343号』の車内での殺害に失敗したから、そのリベンジだったんだろうね。その頃、砂丘、松風、因幡の三人はずっと『こまち23号』に乗っていたと主張している。三人が揃って行動していたのか、それともその中の誰かが単独で行動して殺人を執行したのか、それは分からない。おそらく全体行動だったと思うんだけど」

礼士さんはグラスを傾け、氷が崩れる音がした。

「潮風さんの死亡推定時刻は9時頃。『はやて101号』は8時58分に仙台駅を出るから、犯人は仙台駅に降りる直前に潮風さんに毒針を刺して、そのまま仙台駅で降りれば良い。そうすれば後続の『こまち23号』に乗って横手に向かうことができる」

時刻表のサイトを操作すると、『こまち23号』は仙台を9時14分に出る。余裕で乗り換えられる。

「乗り換えの方法にはもう一つあるんだ。『はやて101号』で北上駅まで出て、そこから北上線の普通列車に乗り換えても横手駅には11時38分に着く」(図⑧参照)

北上線、初めて聞く路線だ。(図①参照)

「音戸さんだっけ？ 横手駅で出迎えた人は『三人が11時40分頃に出てきた』って言うっていたから、この乗り換えでも問題ない。どっちを使ったのかは僕には分からないけど、『はやて101号』と『こまち23号』を乗り継ぐとなると指定席を仙台で区切って買う必要があるから、北上乗り換えで行ったと思うんだけどね」

何だかガバガバな推理だ。そもそも何人で決行したのかも分からない、どのルートで乗り換えたのかも絞り込めない、大丈夫なのだろうか？

東京→横手 北上線経由

はやて101号

東京	7 : 16	発 (21番線発)	
上野	7 : 22	発	
大宮	7 : 42	発	
仙台	8 : 58	発	
古川	9 : 12	発	
くりこま高原	9 : 22	発	
一ノ関	9 : 37	発	
水沢江刺	9 : 47	発	
北上	9 : 55	発	→ 北上線普通731D 10 : 20 発
新花巻	10 : 03	発	↓
盛岡	10 : 15	終着	横手 11 : 38 着

出典：JTBパブリッシング『JTB時刻表2013年9月号』

「これはアリバイ工作にしては単純だから、矢野警部も解けたって言うたよ。北上線経由のルートには気付いていなかったけど」

「ふーん……それで、証拠はあるの？」

私は核心に触れる。

「うん。少なくとも、三人が嘘の証言をしていることは明らかだよ」

礼士さんは少し自信ありげに言い切った。

「三人は『こまち23号』の12号車4A席、4B席、4C席を指定して座っていたって言うていたよね。その車内で何をしていたか覚えてる？」

「……確か、パソコンで映画を観ていたんだっけ？」

探偵は私の言葉に頷き、ピスタチオを口に入れる。

「三人揃って観ていた」と証言したそうだよ。つまり、一台のパソコンを三人で観ていた、そう解釈できる」

そりゃそうだ。どこがおかしいのかわからない。何もおかしな部分は思い当たらない。

「じゃあ、『こまち23号』の座席表を見てみようか」

礼士さんが私の手からスマホを取り上げ、いじる。

「『こまち23号』に充当されたE3系はミニ新幹線と言つて、在来線に直通できるように車体が小さく作られているんだ。だから2列+2列という座席配置になつてるんだよ。在来線の特急列車と同じだね」

スマホをまた私に渡す。JR東日本の公式サイトだ。

「瑞穂さん、三人が座った席はどうなってる？」

三人の席……4A席、4B席、通路を挟んで4C席……ん？

「2列+2列だから、4B席と4C席の間が通路で隔てられてるのね」(図⑨参照)

こまち23号 12号車座席表

D																	
C				▽													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
B				◇													
A				△													

- ▽：因幡の席 (12号車4C席)
- ◇：松風の席 (12号車4B席)
- △：砂丘の席 (12号車4A席)

写真：『こまち23号』普通車 (13号車の写真で代用、プライバシー保護のため画像を一部加工してあります)



座席表出典：JR東日本公式サイト

「そう、それだよ。4B席と4C席の間が通路で隔てられている。それなら、あの三人はどうやって一つのパソコンで映画を観たんだろうね？」

「……」
虚を突かれた。

「……確かにそうね。通路を挟んで向かいの席のパソコン画面なんて見えるわけがない。『こまち23号』の車内で三人揃って映画を観るなんて不可能ね」

私の気付きに礼士さんは満足そうに微笑んだ。

「ここから先は何の証拠も無い推論になるけれど、恐らく三人は最初から『はやて101号』に乗っていて、北上線経由で横手に向かったんだと思う。『はやて101号』に充当されたE2系新幹線はともスタンダードな列車で、普通車の座席も3列+2列になってるんだ。全車指定席の列車に三人で乗るとなれば、必然的に三人掛けの席を横一列で押さえるよね？」

私も多分そうするだろう。グラスを空にしながらかく、
「三人とも東北は初めてだったらしいから、『こまち』に乗ったことがあるはずがない。『こまち』も全車指定席なだけでなく、乗らない列車の座席を調べるわけがない。だから『こまち』が2列+2列の座席配置だと知る由もなく三列シートへの着席が前提となる嘘の証言、先のパソコン視聴の証言をしてしまった。こんな所だと思っよ」

「でも、何で『こまち』は2列+2列なの？」
「在来線に直通できるように、『こまち』は車体が小さくなってるからね。当然、横幅も狭くなるから3列+2列という座席配置はスペース的に無理なんだ」

何か、似たような話を前に東京駅で聞いた気がする。
「ふうん……でも、どうして北上線経由なんていうマイ

ナーな経路を使ったの？ 正直、北上線なんて私も今初めて聞いたし、東北に明るくない三人がその路線を知っているとも思えないんだけど」

「多分、『はやて101号』の指定席と『こまち23号』の指定席を別々に押さえることを嫌ったんだと思うよ。」

別路線を走る列車ならともかく、『はやて101号』も『こまち23号』も同じ東北新幹線の列車。自由席があるならまだ乗り換えやすいけれど、両列車とも全席指定だから、乗り換えるには一つの路線で二つの指定券を持つ必要がある。そんなことをする奇特な人間は鉄道ファンでもない限りいないから、足が付きやすいつて考えたんじゃないかな？ 本当は『はやて101号』も仙台〜盛岡間の各駅でのみ使う場合は指定券を持たなくてもいい特例があるんだけど、東北に行ったことが無い人間がそんな特例制度を知ってるはずがないしね」

「面倒なのね……そんなにまだるっこしい乗り換えをするなら、最初から『こまち23号』への乗り換えなんて考えずに始発駅から『はやて101号』に乗って、北上線へ乗り換える方が分かりやすいかも」

酔いもあつてそこまでしっかりと理解できなかった私は適当に相槌を打っておいた。

「話はこれでおしまい。……どうする、まだ呑む？」

首を横に振る。視界が僅かにぐらりと揺れる。結構な酔いが回っているようだ。それなのに、謎を解き明かした恋人を目の前に私の心は後ろめたさで段々と冷たくなっていった。

「……大丈夫？」

気が付くと恋人の顔が真横に来ている。彼の垂れ目が、私をやや吊り気味の目を映す。心の霜は一気に吹っ飛び、頬に熱が差した。誤魔化すように頷くと、酔いが少し冷

めていた。

「ごめん。このお酒、思ったよりも強くて」

「ありやいや……マスター、水を」

ひんやりとした流れが口から喉へ、そして胸の奥を通る。気持ちよかった。

「もう大丈夫よ、ええ。大丈夫」

ずり落ちた眼鏡をかけ直す。角張った青いアンダーリムの眼鏡は、前の事件が終わった後にこの人と一緒に選んだものだ。

「そう？ じゃあ出ようか。マスター、お勘定をお願いします。ごちそうさまでした」

時刻は1時前だ。

* * *

「ねえ……さつきさ？」

私と礼士さんは並んで歩いていた。

「ん？」

バーからの帰り道。道の両脇にはうらぶれた飲み屋や風俗店、ラブホが立ち並んでいる。色っぽさを前面に押し出した安っぽい灯りが、思い出したように私と礼士さんを照らす。

「叶ちゃんがさ……あなたに迫ったじゃない？ 礼士さんが店に来た時」

よく覚えていないのか、返事に時間がかった。

「……ああ、そうだったっけ？」

私達の他に人の姿は無い。そのはずなのになぜか後ろから視線を感じた。

「どうしたの？」

振り向いても、そこには少し下品な色合いの灯りが無人の通りを照らしているだけだった。

「……うん、何でもない」

気のせいだったのだろうか？ 疑念を振り払い、話題を戻す。

「礼士さんさ、私と叶ちゃん、どっちが好き？」

恋人は垂れ目を少し大きくした。きよとん、という感じがぴったりの表情を浮かべた。

「え？ 瑞穂さんだよ」

「……ほんと？」

礼士さんは優しい笑みを浮かべた。私にしか見せることがない、そう思いたい笑みだ。

「当たり前だよ」

礼士さんの垂れ目が眼鏡越しに、私から背後の建物にそっと視線を投げた。

「すっかり遅くなっちゃったね。部屋まで送るよ」

視線が逸らされる。言葉が一旦途切れ、続く。

「……それとも、どこか寄っていく？」

礼士さんの言わんとすることは察した。私も半分はその覚悟をして飲みを誘った。深夜の色街、恋人同士。誘われてなお、こんなにも穏やかな気持ちでいられるとは思わなかった。

礼士さんは歩みを止め、黙って私の返事を待っている。何事もなく帰って寝るもよし、この人に抱かれて朝を迎えるもよし。私次第だ。

「……礼士さんはどうしたい？」

私は口調を変えずに質問で返す。でも、語尾が少し震えたかもしれない。何事もなく帰るには物足りない、だけれど……抱かれるのが怖くないとは、言えない。いくらこの人を信じている、その気持ち揺るがないとしても

「このまま帰りたい……って言ったら、嘘になるかな」

その言葉に、返事が僅かに遅れる。

「……そっか」

そうだろうな、とは思った。付き合い始めてふた月、まだこの人は私を知らない。

「そっか……」

ふた月。あつという間だった。私は確実にこの人に惹かれていく。この人が好きだ。

でも……そろそろ、潮時なのかもしれない。

本当は釣り合わない二人なのだから。

「……無理はしないでね？」

礼士さんの一言で我に返る。

「瑞穂さんが望まないのに、それを押し切ってまでして……そうまでしてあなたを抱こうとは思わない。そういうことはしたくない」

その言葉は、どこか遠い異国の言葉のようだ。咀嚼するの時間がかるのは、それだけ縁が薄かったから。

「大事にしたいんだ。あなたを」

笑みを作る。面と向かってこう言われてまでされてもなお、笑みをわざわざ作っている私に吐き気がした。

「ううん、平気」

「……ほんと？」

私はこの問いを冗談交じりで聞いた。聞かれる立場になると、礼士さんの口調は笑っていても目は笑っていない。

「本当よ」

私は礼士さんの手を掴んだ。温かく、大きな手を。

ごめんね、礼士さん。

本当は大丈夫じゃない。

でも、あなたなら……大丈夫かもしれない。

*次回作へはお乗り換えです。このままページをめくってお進み下さい。